沼津市
明治史料館通信

1987.10.25（季刊 年4回発行）Vol.3 No.3 通巻第11号

シリーズ
沼津兵学校とその人材 ⑩

沼津兵学校附属小学校の女子教育とその教員

沼津兵学校の開校に先立ち明治元年八月に発布された「陸軍解兵御仕方書」には、旧幕臣移住者の生活難を想定して、婦女子に対しても蚕桑・織職・糸取といった家計の助けとなるような実業教育を施すべきことが規定され、「女教師」の設置も構想されていた。

実際に女子教育が開始されたのは、明治三年（一八七〇）沼津兵学校附属小学校においてであった。最初剣術の道場として使用していた瓦葺平屋の建物を女生徒専用の教室にあてたというから、女子の入学が許可されたとはいうものの、男女共学ではなかったようだ。ここでの女子教育の実態がどのようなものであったかは不明であるが、兵学校三等教授永持明徳の義妹（後に夫人となる）で維新当時六歳だった永持春は、真野文二らの男子生徒と英語・数学を学んだという（『九十四年の人生―永持源次随想集』昭和五十四年）。女子に対しても英語を教えたという事実は、沼津兵学校附属小学校の女子教育の先進性を示している。

ところで、この附属小学校の「女生徒教員」は、「小松賢一郎夫妻」だったとされる（『沼津市誌』昭和十二年）。以下、小松氏について紹介してみる。小松賢一郎（盛正）は、旧幕臣で、昭和三年（一九二八）に八十一歳で亡くなっているので、維新当時は二十歳くらいであった。その妻も「女生徒教員」であったというが、彼女については、本名は不明で、華香院蘭室理秀大姉という戒名と、明治十八年（一八八五）に亡くなったことしかわからない。賢一郎は、その後小学校の教師を続けたらしく、明治八・九年頃は富士郡天間村の諧暢舎で教えていたことが断片的に知られる（『鷹岡町史』昭和五十九年）。

小松家は、戦前まで沼津の西条町にあったが、現在御遺族は東京に移られている。甲冑・刀剣類や文書・書籍など多数の資料があったというが、沼津空襲のため焼失してしまった。奇跡的に残された資料には、矢立・財布などの遺品や賢一郎の写本・短冊などがあるが、兵学校当時のものは存在しない。残った資料によると、賢一郎は書と和歌を得意としていたらしいことがわかり、兵学校附属小学校でも習字などを担当していたのかもしれない。

なお、賢一郎の父陳盛は、明治二十八年（一八九五）に建てられた沼津兵学校記念碑の発記者五名のひとりである。また、陳盛の次男で賢一郎の実弟にあたる松山温徳は、沼津兵学校の第7期資業生で、後に東京商船学校（現東京商船大学）校長や日本海員掖済会理事をつとめた人物である。

沼津兵学校附属小学校女生徒教員
小松賢一郎
（小松千枝氏提供）

ぬまづ近代史点描⑦

沼津移住旧幕臣の著名人

――沼津にいた意外な人々――

維新直後の沼津、すなわち明治元年から四年くらいまでの静岡藩時代の沼津には、江戸から移住した大勢の旧幕臣たちがひしめいていた。その中には、沼津兵学校の人材以外にも、優れた人物や有名な人物が少なくなかった。以下に紹介するのは、そのような人々であり、こんな人も沼津にいたのかという意外な事実もある。

なお、今回詳しく紹介できなかった人々の中にも、東京商船学校長となった中村六三郎、幕末の遣米使節だった成瀬善四郎、最初の女子留学生となった永井繁子、幕末の遣露使節だった橋本悌蔵、彰義隊の九番隊長だった大谷内竜五郎、明治の南洋探検家となった鈴木経勲、精神病学の大家で医学博士になった榊保三郎、理学博士・東京天文台長になった平山信、海軍中将になった山口鋭、といった旧幕臣子弟が、幼少時代や人生の一時期を沼津で過ごしている。

三世柳亭種彦こと高畠藍泉

1838～1885

柳亭種彦は、幕末の通俗的な絵入り読み物である合巻の代表作「偐紫田舎源氏」の作者として知られる戯作者である。高畠藍泉は、そのペンネームを襲名した三代目の柳亭種彦である。

高畠家は幕府のお坊主衆だったが、藍泉は明治三年沼津に移住し、同四五年頃まで茶道や発句の宗匠をしながら暮した。上京後、「東京日日新聞」「読売新聞」「東京曙新聞」などの記者をしながら、作品を発表した。彼の作品は、江戸時代以来の戯作文学の継承であるとともに、明治の新興小説の先行形態でもあったという。

星亨を刺殺した剣客伊庭想太郎

1851～1907

明治三十四年六月二十一日、東京市役所内参事会会議室において立憲政友会の実力者星亨が刺殺された。東京市参事会員や東京市教育会長として市政や教育界に盛んに勢力伸張をはかっていた星は、その傲慢なやり方に対して少なからぬ人々から反感を持たれていた。その暗殺犯人が伊庭想太郎である。伊庭家は代々心形刀流という剣術の宗家であり、想太郎の父軍兵衛は幕府の剣術師範をつとめた。兄八郎も剣客として知られ、箱館戦争で戦死した。想太郎は、維新時江戸から遠州横須賀に移住したが、沼津の中根淑（兵学校教授）のもとで漢学・洋学を学んだ。上京後は東京農学校（現東京農大）校長や四谷区会議員などをつとめていた。明治四十年に獄死。

八甲田山雪中行軍遭難の責任者山口鋭

1856～1902

明治三十五年（一九〇二）一月、日露戦争を想定して行われた青森歩兵第五連隊の八甲田山雪中行軍は、凍死者約二百名を出す惨事となった。この事件は小説や映画にも取り上げられ、周知であろう。実は、第五連隊第二大隊長としてこの行軍の指揮にあたっていた山口鋭少佐は、明治初年の少年時代を沼津で過ごした旧幕臣であった。彼は幕臣成沢良作の三男だったが、実兄には沼津兵学校資業生成沢知行、義兄には兵学校教授渡部温がいた。沼津では渡部家に同居していたという。明治四年に上京、同十二年陸軍士官学校に入学し、日清戦争にも従軍した。

遭難後救助され病院に収容されたが、多数の部下を死なせてしまった責任をとり自害した。

進化論を普及させた動物学者
石川千代松（いしかわちよまつ）

1860～1935

石川は、丘浅次郎とともに日本における進化論普及の功労者として知られる動物学者である。

彼は、幕末に江戸で生まれ、父石川周二（潮叟）が維新後静岡藩の権少参事・沼津郡政方に任命されたため、駿河国駿東郡徳倉村（後八幡村）に移住したのである。駿河での少年時代に自然に親しんだことが、彼に動物学への道を歩ませることになったという。

明治五年上京、同九年開成学校入学、同十五年東京大学理学部生物学科卒業。東大ではモースの進化論講義に感化された。その後ドイツへ留学、フライブルク大学のワイズマンに師事し、細胞学・発生学を学び、帰国後東京帝国大学教授となった。進化論を人間界にも適用し、社会問題にも発言した。

新聞小説家・紀行文作家
遅塚麗水（ちづかれいすい）

1866～1942

父保は、騎兵指図役として鳥羽・伏見の戦いにも参加した旧幕臣であり、維新後駿河国駿東郡小諏訪村に移住した。その長男だった麗水（金太郎）は、明治九年に上京するまで沼津で少年時代を過ごした。幸田露伴の紹介で明治二十三年処女作「冷千水」を『読売新聞』に発表し、「郵便報知新聞」に入社、記者および小説家として身を立てていくことになった。日清戦争に従軍記者として参加したのち、「都新聞」に転じ、昭和十三年に退職するまで同紙の社会部長・理事・編集顧問をつとめた。その間多数の現代小説・歴史小説を発表し、明治後期からは特に紀行文に才能を発揮した。彼は、紀行文を詩の域まで高めた先駆者・大成者といわれる。

明治の女流作家第一号
三宅花圃（みやけかほ）

1868～1943

明治元年東京で生まれた。父は幕府の外交官として活躍した田辺太一（蓮舟）である。本名龍子（たつこ）。父が沼津兵学校一等教授になったため、彼女も沼津に住んだのではないかと思われる。明治三年には父が外務省に出仕したため、沼津を離れ上京したらしい。

明治女学校や東京高等女学校で学び、明治二十一年処女作「藪の鶯」を発表した。この小説は、坪内逍遥の「当世書生気質」の向うを張った「当世女学生気質」ともいうべき内容だったが、彼女を明治女流文壇の草分け的存在たらしめ、樋口一葉にも刺激を与えた。

明治二十五年、雑誌「日本人」を主宰した評論家三宅雪嶺と結婚した。その後も歌人・小説家として文名をはせた。

沼津で生まれた海軍大将
井出謙治（いでけんじ）

1870～1946

沼津出身の大将というと、大岡村出身の井口省吾陸軍大将がまずあげられる。（旧幕臣で沼津兵学校附属小学校出身の加藤定吉海軍大将もいるが）。実はもう一人、沼津出身の海軍大将がいたのである。

明治三年五月、駿河国駿東郡上香貫村中原（たぶん士族長屋）で旧幕臣井出勝三の子として生まれた井出謙治がそれである。

上京後、開成中学を経て、明治十八年海軍機関学校、同二十年海軍兵学校に入学。日清戦争従軍後、アメリカへ留学、日露戦争では大本営海軍大臣副官をつとめた。駐英大使館付武官や呉鎮守府参謀長・第四戦隊司令官・軍務局長を経て大正九年海軍次官に就任し、同十三年に海軍大将および軍事参議官となった。

お知らせ欄

◎秋の講演会開催のお知らせ

秋の議演会をつぎのとおり予定しております。お誘いあわせてご来場下さい。

と　き：11月1日(日)
　　午後2時～4時
ところ：明治史料館　講座室
講　師：佐藤　隆氏
（県史編さん室主席指導主事）
テーマ：「古文書にみる村のすがた―箱根用水を中心として―」

◎テーマ展「絵はがき展」の開催

「沼津御用邸」に象徴されるように、明治から昭和にかけ、風光明眉な沼津は別荘地や保養地、観光地として栄えました。

郷土で発行された観光絵はがきの展示を中心に、昔日のリゾート地沼津をふりかえります。

と　き：12月20日(日)～2月28日(日)
ところ：4階展示室

◎新刊行図書紹介

●沼津市明治史料館史料目録1
「江原素六関係史料目録」

当館収蔵史料の中核をなす江原素六翁の関係史料八、〇〇〇点余を収録した目録です。翁は幕末から大正にかけ、幕臣、教育者、政治家、クリスチャンとして活躍し、その資料中には政治、教育、宗教、社会事業などに関する直接、間接のものを数多く含んでいます。

B5判　三〇九頁
一般向け頒価　二、〇〇〇円
（送料三〇〇円）

●企画展図録
「浮世絵に描かれた沼津」

今年度企画展「浮世絵に描かれた沼津」は8月27日をもって好評のうちに終了いたしました。

開催期間中、販売していた図録の残部がまだ少しありますので、展示会を見過ごされた方は是非お買い求め下さい。

B5判　二四頁　カラー図版
頒価九〇〇円（送料二〇〇円）
※郵送の場合の送金は郵便局の定額小為替に換えてお送り下さい。

◎小学校社会科研究作品展が開催されました。

10月10日(土)から18日(日)までの九日間にわたり、当館二階講座室を会場に市内小学校社会科研究作品展が開催されました。この催しは、市内小学校の教職員で組織されている市教育研究会の社会科部会が、本年度を初めての試みとして、小学生の夏休みの社会科自由研究の作品を募集し作品発表の場として開催したものです。

会場には、市内二五校の各校から奨励賞として選ばれた、二年から六年生までの作品七〇点程が所せましと並べられ、休日を中心に期間中たくさんの家族連れの見学者でにぎわいました。

作品は、あじのひらき加工・水産業・お茶の歴史など、地元の産業をとりあげたもの、自分の住んでいる町の様子や町名の由来、史跡や古墳などを調べたもの、家業や自分の食生活に興味をもって工場や産地を訪ねたもの、箱根旧街道や狩野川の遡行などを自分の足で確かめたものなどのほか、夏休み中の旅行記もあり、ユニークなところでは、テレビのCMや新聞の折込広告を曜日別に調べ、平日と休日との違いに気付いた作品もありました。

社会科研究作品展から

作品発表には何枚もの模造紙や画用紙にたくさんのイラストや図、写真、グラフなどをふんだんに折り込み、実物も添えるなど生徒の熱心な取組と苦労のあとをうかがわせていました。

広報担当の勝俣先生（第一小）は「来年は発表会の開催も併せて考えてみたい」と意欲をみせています。館でも、このような展示会が博物館を会場に開かれることは、学校教育と博物館利用を考える上で大変意義あることと捉え、今後とも協力していきたいと考えています。

沼津市明治史料館通信　第11号
編集　発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂372―1
☎〇五五九(23)三三三五